発行　研修部会

「尾上ガイド」

かこがわ人の会

平成 28 年 9 月 30 日

目　次

尾上神社	P 1
浜の宮公園	P 3
浜宮天神社	P 3
白旗観音寺（しらはたかんのんじ）	P 5
無量山　泉福寺	P 6
崎宮神社（さきのみやじんじゃ）	P 7
松原の御井	P 7
しおかぜこみち　松風公園	P 8
養田川	P 8
加古川飛行場（尾上飛行場）	P 8
十五神社（十五社神社）・安田	P 9

1、　尾上神社

神功皇后（じんぐうこうごう）が三韓征伐の際、この地に上陸されたが長雨のため船をすすめることができず、「鐘の池」で潔斎沐浴して晴天を祈願されて、住吉大明神を勧請したのが当神社の起源と言われています。

住吉大明神は、底筒男命（そこつつおのみこと）、中筒男命（なかつつおのみこと）、上筒男命（うわつつおのみこと）、息長帯比売命（おきながたらしひめのみこと）のことを言います。

息長帯比売命は神功皇后のことで第 14 代仲哀天皇の后（きさき）のことです。

境内にあった初代「尾上の松」は謡曲「高砂」に謡われた霊松で地上から 3mほどの位置から、男松（黒松）と女松（赤松）に分かれていた。
女松はまっすぐ伸び、男松は下方に地面近くまで伸び、又上って再び地に這う形で生えていた。

その上った所を鳥居とし、人々が参詣したと言われています。

「現在の松は７代目で８，９代目は養生中です。」

又、境内にある「片枝の松」は、神社を創建された神功皇后を慕って、枝葉がことごとく東に向かって張ったと言われています。

そのため「都恋しき片枝の松」と言われた。その形は龍がうずくまった形に似て美しく、色も鮮やか

な松だったが、昭和 24 年に枯れてしまって現在の松は 3 代目です。

神社の収蔵庫には、国の重要文化財「尾上の鐘」があります。代表的な朝鮮鐘として有名です。

「尾上の鐘」には昔、泥棒に盗まれて海に沈められたあと、漁師の手によって引き上げられ高野山に奉納されたが、鐘を撞く度に「おのえへいの～・おのえへいの～」と聞えた為、尾上神社に戻されたと言う伝説があります。

鐘は高さ 1.2m、周り 3m、厚さ 7 ㎝で、天女が楽器を演奏する様子が描かれています。

ひび割れがあります。

又、鐘の音の聞こえる範囲の海を「響きの灘」と言われていました。

千載和歌集巻 6 の大江何某の歌に「高砂の尾上の鐘の音すなり　暁かけて霜や置くらん」というのがあり、小倉百人一首には「高砂の尾上の桜咲にけりとやまの霞たたずもあらなん」があります。

他にも尾上を詠んだ歌は沢山あります。

本殿、拝殿など 4 棟の建物は、国の登録有形文化財になっています。

建物は東播地域の木造建築の神社で一番古いもので、室町時代後期に建てられ 450 年の歴史があります。また神紋は揚羽蝶です。

2、　浜の宮公園

昔の加古の松原で市の木「黒松」が群生する公園です。

甲子園球場の約 12 倍の広さがあり、15.9ha あります。公園内には黒松が約 3400 本あります。

グランド、手軽にジョギングが楽しめるトリムランニングコース、バレーボールコート、ローンボールコート、市民プール、自由広場があり、市民にとって大切なレクリエーションの場になっています。

公園の北側には、菅原道真公をお祀りする「浜宮天神社」があります。

朱塗りの新しい社殿が美しく、境内には官公お手植えの「加古の浜松（2 代目樹齢 550 年)」があります。

松林の中には戦争遺産が残っています。

昭和 12 年（1937 年）陸軍加古川飛行場（尾上飛行場）が完成。戦争激化とともに、陸軍航空通信学校尾上教育隊が開設され、浜の宮公園付近に多数の兵舎が建てられました。

終戦後に全て取り壊されましたが、門柱や基礎などの遺構が戦争遺産として保存されています。

3、　浜宮天神社

神社の由緒は 901 年、菅原道真公が大宰府に左遷の途中当地で休憩され、海上の平穏と人々の幸福を

祈願され、松を植えられた。

後世の人が 1012 年に祠を建ててお祀りをした。文安元年（1444 年）に社殿を建立し、学問の神様としてお祀りされました。

主祭神は菅原道真、脇殿には大国主命、少彦名命がお祀りされています。

昭和 50 年現在の社殿が完成、学業成就、縁結び、家業繁栄、交通安全の神様として仰がれています。

氏子は新野辺（別府町）、口里、安田（尾上町）、北在家（加古川町）、長砂、鵤、坂井、古大内（野口町）の広範囲にわたっています。

道真公の代表的な歌で、京都を出られるときに詠まれた「東風（こち）吹かば　にほいおこせよ梅の花　あるじなしとて春をわするな」があります。

又、小倉百人一首にも「このたびは幣（ぬさ）も取りあえず手向山（たむけやま）　紅葉の錦（にしき）神のまにまに」の歌があります。

道真公が植えられた「加古（鹿児）の浜松」は、浜宮天神社境内にありましたが、明治元年（1868 年）に枯れてしまい、現在は社殿の東に 2 代目が生い茂っています。樹齢は 550 年で、道真公が眠る九州の方角に枝を伸ばしています。

4、　白旗観音寺（しらはたかんのんじ）

山号生竹山　曹洞宗の寺院で本尊は釈迦如来、聖観世音菩薩です。播磨西国 33 ケ所第 28 番札所になっています。

寺伝によると、延喜 16 年（916 年）観音像を持った阿蘇神社の宮司・友成（ともなり）が京都へ向かう途中に、高砂の港に船を止め高砂、尾上を見物した後、ここで一泊しました。

その夜、友成の夢の中に観音様が現れ、「この付近は波が高く船が航行に難儀しているので、この地に留まって船人たちの苦悩を救う」と言いました。

そこで友成は藤内（とうない）という人に観音像を預け、安置するための堂を建てたのが観音寺の始まりと言われています。

友成が船に乗る前に砂に突き立てた竹の杖が俄かに枝葉が生い茂ったことから、生竹山の山号になったと言われています。

観音像を譲り受けた藤内が、夢の中で観音様から「船が災難を受けた時には船の後ろに白い布を揚げよ」と白い布を与えられた。

目を覚ますと白い布が観音様の宝冠の上にあったので、これは観音様からのお告げであると、藤内が白い布を船印として航海するように港の人に伝え、白い布を船印として揚げると荒波が静まったと言われています。

山門の生竹山の扁額は、山岡鉄舟の書です。又観音寺は寺としては珍しい絵馬堂があり、船を題材にした絵馬が大小30枚ほど奉納されています。

赤い顔のびんずるさんも珍しいです。

ご詠歌は「いくちよをかけてうえにしいけだやまたもとにかかるささのはのつゆ」です。

平成28年4月には観音像がお祀りされて1100年を記念した行事があり、秘仏観音像が御開帳されました。

5、　無量山　泉福寺

曹洞宗の寺院で本尊は地蔵菩薩です。元来は鶴林寺系の天台宗の寺院。

江戸中期以前は大崎にあったが、今福に移り曹洞宗になりました。

本堂は昭和57年に再建されました。

本堂左手にある地蔵堂の地蔵菩薩は「北向きの身代わり地蔵尊」として信仰をあつめています。

境内には文和2年(1353年)の五輪塔、延宝4年(1676年)の石幢があります。

又、泉福寺は尾上町出身の俳人永田耕衣の菩提寺で、主宰していた「琴座」に因んで、竪琴を模した金属製の句碑があります。

6、　崎宮神社（さきのみやじんじゃ）

祭神は大巳貴命（おほなむちのみこと）、須佐能男命（すさのおのみこと）、稲田姫命（いなだひめのみこと）です。推古天皇の御世、このあたりに雌雄の大蛇が住んでいて、人々を苦しめたので聖徳太子は須佐能男命が出雲の簸川で大蛇を退治された故事に鑑みこの地に鎮祭されたと言われています。

高砂神社との関連が深く、祭神は同じです。

「古事記」に登場する大国主命（おおくにぬしのみこと・出雲大社の祭神）とヤマタノオロチの出雲神話に登場する神々です。

7、　松原の御井

この井戸は尾上町養田にあります。播磨国風土記によると、大帯日子命（おおたらしひこのみこと）・景行天皇の皇后・印南別嬢（いなみのわきいらつめ）が亡くなられて、悲しみのあまりこのあたりに宮を移された時に掘られた井戸と言われています。

この井戸の水は昭和初期まで崎宮神社、尾上神社の神事に使われていたとのことです。

泊川の下流、加古川下水処理場の裏にあります。近年泊川の遊歩道整備に伴い、憩いの場として修理、再現されました。いつのころからか水は涸れてしまっています。

8、　しおかぜこみち　松風公園

加古川の分流である泊川沿いに造られた海へと続く散歩道、自転車と徒歩しか通行できず、信号もないので歩くのに最適。一定間隔で休憩用のスペースやトイレが設けられています。

加古川と並行して造られており、加古川河口付近にある「松風公園」は、緑に囲まれた散策路を潮の香りを感じながら歩くことができます。

公園の西側には「リバーグリーンエコ炭銀行」の作業場があります。

9、　養田川

養田川は加古川から取水した五ケ井用水が市内の農地を潤したあと、最後に流れる川で、市内で最も短い1445mの準用河川です。

近年地元の人々によって水質改善や、環境保全がすすめられています。

１０、加古川飛行場（尾上飛行場）

加古川飛行場は、昭和12年（1937年）に日本陸軍が開設した飛行場です。

飛行場が尾上村にあった所から尾上飛行場と呼ばれていました。

関西地方の防衛拠点として、また少年兵の訓練拠点になっていました。

500m～1500mの滑走路が5本もあったそうで、広さは、尾上村の4分の1を占めていたらしいです。

太平洋戦争末期、昭和19年（1944年）10月ごろからは、関東方面の陸軍基地から鹿児島県の知覧町の特攻基地に向かう特攻隊の中継拠点になっていたようです。

この飛行場からも出撃した特攻隊もあったそうです。

昭和20年（1945年）終戦により、軍の飛行場ではなくなりましたが、終戦後も遊覧飛行の飛行場や、自衛隊の訓練所として利用されたらしいです。

飛行場跡地は現在、オーミケンシ加古川工場や大型店舗、住宅地になっています。

１１、十五神社（十五社神社）・安田

浜宮天神社の氏子内神社の一社で浜宮天神社の本宮とか、上の宮と呼ばれています。

境内地は「播磨鑑」に安田構居跡と伝えられ、南側には溝が残っています。

城主は魚住左近大夫と言われています。

十五神社略記によると、貞観9年（867年）当地方に牛の疫病が流行し、そのうえ、長雨が1ヶ月以上も降り続き、人々は大変困り果てて、鹿児の庄の曹主、阿志良輔を中心として、大和の15ヶ所の神社に参拝し、天候の回復を祈願したところ、長雨も

やみ大豊作になった。

人々は大変喜び、貞観 10 年（868 年）に 15 の各社の神々を当地にお迎えしたのが起源である。

延喜元年（901 年）菅公筑紫下向の途中、当社に参拝、海上の平穏と万民の幸福を祈願された。

長和元年（1012 年）北野天満宮より菅公の御神霊をお迎えして、当社の傍らに小祠を建てお祀りしたのが、現在の浜宮天神社の起源であると伝えられています。

MEMO 1